

## 平成25年度教員インターン実習の成果と課題

鎌田 義彦<sup>1</sup> 川野 司<sup>2</sup> 松村 千鶴<sup>1</sup>

<sup>1</sup>九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

<sup>2</sup>九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科

<sup>1</sup>北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

<sup>2</sup>熊本県玉名市富尾888番地 (〒865-0062)

(2014年11月13日受付、2014年12月18日受理)

### 要 旨

人間発達学科の学生18名による北九州市内小学校3校での平成25年度教員インターン実習(以下、インターン実習という)が実施された。このインターン実習は、ボランティア体験の深化・充実と位置づけられ、平成26年4月に教職に就く者に対し、実践力・即戦力を備えた次代の教員養成として取り組まれた。併せて、このインターン実習は、小学校の授業を効果的に進めるために必要な教科指導力、生徒指導力等を学ぶための実務について大学と小学校との信頼関係の下に進められた。その結果、担任の補助、直接の児童への指導の経験から教科指導や生徒指導に関する多くの気づきや学修があり学生にとって資質向上に結びつき、教員養成の仕上げとしての有効性を発揮した。また、今後の課題として、この成果を確実なものにするための学内組織の共有や協力学校との連携が挙げられた。

### 1 緒言

少子化が進む中で高等教育である大学、短期大学への進学率が高等学校卒業生の50%(平成25年度学校基本調査速報値)を超えるようになった。これに伴い、教職課程を履修する学生の学力、指向、意欲等に個人差がみられるようになった。本学においても多様な学生に対して、幼稚園教諭、保育士等とともに公立学校教員採用試験の合格を重点方針に据えてその実現を追求しながら、教育職員としての資質・実践的指導力の育成のための方策を模索している。

### 2 本学科の教員採用に係る対策と資質・実践的指導力の育成の対策

本学科では、平成24年度公立学校教員採用試験の合格者は公立小学校教員18名、平成25年度は公立小学校教員、特別支援学校教員22名の実績を積み上げてきた。4年生の前期までの教員採用試験対策は充実し学生たちも活気に満ちているが、教員採用試験結果が一次、二次の合格者が発表される以降、公立学校教員内定者に対する積極的な対応はこれまで組織的に行われなかった。

表1は、人間発達学科において実施される教員採用試験対策の概要である。教員採用試験

対策として例年、4月から各自治体が行う一次試験対策の一般教養、教職教養、専門教養、論文試験、面接試験の対策を行い、8月以降は二次試験対策に当たってきた。

そして、9月以降は、介護等体験、幼稚園、小学校、特別支援学校の3年次・4年次教育実習が行われるため、また卒業研究論文の作成を精力的に進めることから十分な教育職員としての資質・実践的指導力の育成のための対応は行われていない状況であった。後期は4年生への教員採用試験対策の反省を下に3年生への対応に関心は移された。

これまで採用候補者の名簿登載者への対応についても、その必要性を感じながらも資質・実践的指導力の育成のための対策は不十分であった。平成24年8月の中央教育審議会答申によれば、「学校現場における諸課題の高度化・複雑化により、初任段階の教員が困難を抱えており、養成段階における実践的指導力の育成強化が必要」と指摘されている。また、教員に求められる資質について、「不断に最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていくこと」の重要性も指定されている。これらの指摘もあることから、養成段階で教育現場に学生の派遣を行い様々な教育情報を取りこみ、児童を取り巻く最新の学習環境から課題に気づき、授業等で身に付いた知識を基に、学生が自ら考え自ら判断し解決に向かう姿勢を示す活動が必要であるとする。そこで、4年生の4月からインターン実習を行い、前期・後期の1年間を通して、一人の学生に同じ小学校で一貫した対応を取り組ませることにより、これまで

表1 教員採用試験対策の概要

		筆記試験対策	人物試験対策 実技試験対策	模擬試験対策 (有料)
1年	前期			
	後期	一般教養セミナー		
2年	前期	一般教養セミナー		
	後期	一般教養セミナー 教職教養基礎セミナー		
3年	前期	小学校全科 基礎セミナー		
	後期	基礎力養成講座※ 自修塾		全国模試(1月) ※
	休業中	春季特訓講座※ 特別支援教育特訓講座	春季特訓講座	全国模試(3月) ※
4年	前期	教採直前合宿(4月) 直前講座※ 特別支援教育模試	教採直前合宿 (面接・討論) 教採総合セミナー 直前セミナー、実技セミナー	全国模試(4月) ※ 全国模試(6月) ※
	後期			

※ 民間事業者による対応

のボランティア活動とは異なる活動内容を実施することにより資質・実践的指導力の育成についての学修を試みることにした。卒業後の4月に教壇に立つことを想定すれば、まずは名簿登録後も引き続き教員としての職務内容や教科指導、生徒指導等について充実した体験の継続を通して実務に係る内容を学修させなければならないと考えたからである。

### 3 小学校、特別支援学校のボランティア活動への参加

#### (1) 小学校のボランティア活動

人間発達学科では、学生が自己の意志で登録し学校等へ出向くボランティア活動を積極的に推進している。学科内では、「GT：グリーン・ティーチャー」と呼び、所属するコースによって幼稚園・保育所（乳幼児発達コース）でのボランティア活動を含めて1年末から2年の始めにかけて自身の進路目標を絞るという意味から、また2年生より希望で近隣の小学校（児童発達コース）にボランティア活動に参加し、教育活動の補助として子どもたちと接し先生方の指導の工夫等について学修する機会を得ている。平成25年度の小学校GT（グリーン・ティーチャー）派遣実績は表2に示した。最も人数が多い地域は、中間市で次に本学周辺の水巻町、岡垣町である。また、人数の多い学生ボランティアの学年は、2・3年生である。

#### (2) 特別支援学校のボランティア活動

本学での特別支援学校教員免許状の取得について述べる。特別支援学校に在籍する児童生徒の主たる障害種は5障害である。5障害は視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱虚弱で、このうち本学で取得できる特別支援学校教員免許状は知的障害、肢体不自由、病弱虚弱の3つの障害領域についてである。また4年次で実施される教育実習は、この障害領域に即して特別支援学校の知的障害教育校、肢体不自由教育校、病弱教育校で行われる。

表2 平成25年度小学校GT（グリーン・ティーチャー）派遣人数実績

	中間市	水巻町	芦屋町	遠賀町	岡垣町	北九州市	福岡市	計
1年生	—	—	—	—	—	—	—	—
2年生	30	13	2	5	17	9	1	77
3年生	35	8	5	8	8	6	0	70
4年生	3	1	1	0	0	2	0	7
計	68	22	8	13	25	17	1	154

まず、平成24年度から参加している県立特別支援学校知的障害教育校体育大会（以下、体育大会と呼ぶ）の学生ボランティア活動が挙げられる。この体育大会は、毎年9月中旬に行われ、知的障害教育校に在籍する中学部・高等部の生徒が集う競技大会である。体育大会に参集する県立学校教員とともに学生は役割（誘導、記録、決勝テープ等の係）を任されている。

この特別支援学校でのボランティア活動の参加の目的は、小学校GTとの場合と異なっている。特別支援学校教諭免許状の取得をめざす学生の多くが障害のある児童生徒との交流が少ないため、大学生生活の早い時期に特別支援教育の各科目の履修内容の理解を促すために交流の機会を準備した。また4年次の教育実習を予想して、指導力を向上させるために障害のある児童生徒の心理や行動特性を知ることにもねらいとして、1年、2年生を中心に派遣している。次に、4年次で実施される特別支援学校教育実習において在籍する児童生徒との教育活動に積極的に関わるため北九州市立特別支援学校に学生ボランティアとして派遣する特別支援学校GT（児童発達コース）がある。特別支援学校GT等の派遣実績は表3に示した。それぞれのボランティア活動は、実施後に「体育大会の学生ボランティアに参加して」の報告、並びにGT活動記録の提出を求めている。

学生ボランティア活動は、大学の授業による座学でイメージする子ども像と実際に学校等へ出かけることにより児童生徒と接する機会の中から得られる子ども像を一致させようという取組であり、それぞれの教育現場で勤務している教員の具体的な指導・支援する場面を参観・観察する貴重な機会となっている。

#### 4 小学校、特別支援学校のボランティア活動の課題

本学人間発達学専攻・児童発達コースでは、基礎免許として幼稚園教諭免許状、小学校教諭免許状、及び取得希望者には特別支援学校教諭免許状が取得できる。取得するためには教育実

表3 平成25年度特別支援学校ボランティア（体育大会、北九州市立特別支援学校GT）の派遣人数実績

	体育大会	北九州市立	計
1年生	8	—	8
2年生	19	9	28
3年生	0	8	8
4年生	0	23	23
計	27	40	67

習を履修することにより一連の学びを完結する手続きとなっている。

教育実習は、今日の教員養成に求められる社会・学校等からの要望に応え、各学校等の教育の場で有為な人材を育成する上で極めて重要な学修の機会となっている。特に大学にとっては学生を派遣し、学生の教育実習の評価というものがあるがそのまま大学の学生指導の評価に直結している。学生の視点に立てば、3年間・4年間の学修の成果を発揮する場であり、小学校、特別支援学校における教科指導や生徒指導、各種障害特性等に係る概論・総論等から学修した知識を各校の小学校・特別支援学校の児童生徒の実態に応じて適切な指導を行うことが課題になる。

本学のGT（グリーン・ティーチャー）のボランティア活動は、この課題に応えるために準備されたものである。ところが、GT（グリーン・ティーチャー）のボランティア活動は、その活動内容については学生の自主性に多くは任せられている。このGT（グリーン・ティーチャー）のボランティア活動は特定の学校の現場をまず知るという初歩的な意味では、教育実習に連動する点では有効である。

しかしながら、日々の学生一人一人への活動の事後の振り返り、例えば教師の指導するねらいや遭遇する生徒指導場面での疑問点や気づき、教材研究や評価法、学級集団の児童の言動への対応等については十分で丁寧な個別の点検や検討等ができないままに推移している状況である。特に、教育実習では児童に対する生活指導や授業規律の構築、授業に積極的ではない児童

( ) 回目	平成25年〇月〇日	△△:〇〇	～	□□:〇〇	計	時間
活動内容	今日は事務仕事と〇〇をしました。1、2時間目は児童の◎◎アンケートをエクセルでまとめ、表作成しました。私はパソコン作業が少々苦手なため、時間がかかってしまいました。					
学修内容	パソコン操作は苦手であったので〇時間以上使ってエクセル作業をしたのだが、思っていた以上に時間がかかってしまい、◎◎でした。近々大学で様々なレポート提出があるので「速く、正確に」を意識して					

図1 A小学校に参加した学生の活動記録の事例

( ) 回目	平成25年〇月〇日	△△:〇〇	～	□□:〇〇	計	時間
活動内容	〇学部△年生 昼休み、〇〇君とストレッチ、時間がなかったためボール遊びはできませんでした。					
学修内容	5、6時間目は△△でした。◎◎学部全員と□□や△△△△を歌ったり、～〇〇〇〇～を歌いました。合奏曲で新しく□□□をすることになり楽器決めを行いました。					

図2 B特別支援学校に参加した学生の活動記録の事例

への対応などの授業中の生徒指導力、授業の流れを計画的に検討していくことや、特別なニーズのある児童への改善に向けた対応力や児童の学習のつまづきに対する工夫された教科指導力等が、学生の観察から得られた疑問や気づき等の内容に十分応えられるには到っていない。しかし、学生自らが現場で生じる事象を積極的に調べ、大学教員や小学校の先生方に質問し疑問となることが解決の方向を目指しているという点では、現在のボランティア活動は有効と考える。

現在、ボランティア活動日誌等を大学教員に提出し、学生の振り返り等について一部応えようと対策は行われているが、その日誌の提出・点検も学生の自主性に任せられていることが現状であり、課題となっている。図1、図2はA小学校・B特別支援学校でボランティア活動を行った後に提出された活動記録の「活動内容」「学修内容」の記載事例である。

## 5 教員インターン実習について

### (1) 教員インターン実習の目的

インターン実習を進めるに当たっては、これまでの試行的に行ってきた小学校での実地教育の継続と、ボランティア活動の進展を図ることをねらいとしている。また北九州市立小学校で教職に就くことを希望する学生が多い状況を踏まえると、これからの本学人間発達学科人間発達学専攻と北九州市立小学校とが連携して、実践力・即戦力を備えた次代の教員養成に取り組むことが地域における社会的使命であると考えたからである。このため、インターン実習を通して、小学校における効果的支援方法とインターン実習に参加する学生の資質・実践的指導力を高めることに取り組むことにした。

本学のインターン実習とは、北九州市内の小学校の現場に入り、教育を実際に経験し、児童との関わりを通して、教員としての必要な知識・技能を身に付けることを目的にした実習である。今回、インターン実習に参加した学生の中には、授業中の教員補助者として活動した者や教員補助に加えて放課後に実施される教科の復習等への指導として北九州市が主催するアフタースクール事業に取り組んだ者もいた。インターン実習に関しては、本学科教員の共通コンセプトを樹立しながら、このボランティア活動に参加する学生については、4月に選考を行った。そして教職に就く学生が自信をもって教壇に立ち、学校現場での即時に対応できる実践的指導力の養成に努めた。

その概要については、①教員インターン実習について大学でのオリエンテーションと事前指導、②市内の小学校での事前指導、③小学校でのボランティア活動、④小学校における実践活動の振り返りと交流会などを実施した。インターン実習では、学生自身に学習指導や生活指導における明確な課題をもたせ、その解決に向けてインターン実習に臨み、そのことを振り返る時間を与えることで、教員としての実践力・即戦力が高まるものと考えた。そのために、特に小学校のボランティア活動において、ふれあい場を再構成することは、児童との

関わり方を考える上で重要なものである。

後期以降のインターン実習では、小学校と相談のうえ、その後も小学校教員のアシスタントとしての関わりがもてる関係を構築してきた。特に平成26年度新規採用教員として内定が決まった学生は、1学期に続いて2学期以降に小学校教員の補助役として活動できる機会を経験することで、自信を持って教壇に立てるようになるとともに、児童と保護者および地域関係者から信頼される教員に成長することが期待できる。このことは、難関の教員採用試験を突破して教職に就いた教員が、様々な理由により精神疾患に陥ったり、場合によって教職の難しさに直面して早期離職を余儀なくされるという現実は、貴重な人材の損失であり、なんとしても避けたい事例である。

## (2) 「ふれあい場面」の再構成について

「ふれあい場面」の再構成は、教科指導おける児童の把握や教育活動で生じる生徒指導など学級経営上の課題の解決について整理してくれる重要な交流場面である。児童の示す言動に視点をあて、担任教師と児童との関わりの方面の観察や学生との直接指導のコミュニケーション場面として取り上げ、その展開を想起し記録させて学習のつまずきや出来事の因果関係を推測させ、解決に向けた指導力を高めるための有効な方途となる。

学生のボランティア活動では、授業中の教科指導、昼休みや放課後の学習指導等の活動で児童の観察・指導を推進してきた。その時、児童の言動に対して自分の感じたことを取り上げ、児童に声掛け等を行い、児童の言動の変化の有無等について考察する課題を与えた。学生に児童の気になる言動に注意を向けさせ、自分がその場でどの様に考えて児童に指示や指導を下したか、その直後の児童の示す言動等に再度観察と考察を加えることを繰り返すことにより、自己の指導力と対峙させる課題を課した。担任の先生の発問、板書の書写と机間指導、学習に積極的ではない児童への声掛け、指示や励まし等を観察し、その後の児童の態度等がどの様に変容していったか、児童への一つ一つの指示や指導の意味を学生に考えさせた。この観察の記録用紙は図3に示す。そして、この記録の後には、なぜこの場面を再構成しようと考えたのか、この場面にはどのような児童の状況・背景があるか、児童と対応していく過程で、どの様なことに気づいたかについての課題を課した。

私が見たこと・聞いたこと (児童の言動・行動)	私が考えたこと・感じたこと (私の内心)	私が言ったこと・行ったこと (私の言動・行動)
○授業中に、ノートに書いた答えが合っているが、自信をもって手を挙げて発	○この児童は、自分に自信がないために答えが合っているか不安で発表することがこ	○挙手したいのに挙げるができない様子を見たときに、「答え合っているよ。発表し

図3 「ふれあい場面」の再構成シートの一部記録事例

## 6 教員インターン実習の成果と課題

### (1) 振り返りレポートによる評価

インターン実習に関する先行研究として「平成25年度玉川大学教育実習（小・中学校）（横浜市、川崎市、町田市、相模原市）に関するアンケート」（玉川大学教師教育リサーチセンター）結果の大学への要望には、【指導について】○授業における発問の仕方を学ばせてほしい、○生徒の理解の即した授業展開ができるようにしてほしい、○自ら学ぶ意欲を育む人間形成をお願いしたい、○コミュニケーション力を高める指導をしておいてほしい、○教職を目指す強い志をもって実習に臨んでほしい、○意欲を向上させる指導をしてほしい、○子どもたちが好きで、熱意のある人材を育ててほしい等々の要望が挙げられている。これらの内容は、本学のインターン実習に参加した学生の成果や課題からも多く含まれる内容であった。

### (2) 教科指導に関する成果

18名の学生からの報告書について、4事例を取り上げ教科指導と生徒指導に分けて事例の検討を行ってみた。

#### 【事例1】「児童への声掛けと言語活動を意識した授業づくり」（5月～12月 13回実施）

3年生は、外面的には学校生活に慣れてきているが、内面的な心の発達には個人差が現れる時期である。①教師は児童にどのような指導、声掛けをしているのか学びたい。また、②言語活動を授業にどう組み込んでいるのかについて課題設定した。

教員インターン実習の内容：私が、授業中に机間指導しているとき、学習への意欲が見られなかったり集中力に欠けたりする児童に対して、どのような声掛けをすれば児童が意欲的になるのか分からず、優しく声掛けをしたり丁寧に説明したりしても児童の学習への意欲を引き出すことができなかった。

観察：①先生は、「○○君、こうしてみたらいいかもね」や「△△を参考にして考えてみなさい」と具体的な助言をしたり、黒板に他の児童にも分かるようにヒントとなるようなことを板書したりして児童に的確な助言をなさっていた。先生の声掛けはいつも具体的で、児童によっても言葉を選んで声掛けしておられた。指導後、児童ができたらずぐに褒めることで児童は授業に意欲的に取り組むようになっていた。②先生は日頃、児童に自分の考えを発表させる機会を多く設けている。具体的には、授業の後に日直にその時間の学びを発表させたり、朝の会で日直にスピーチをさせ、そのスピーチに対する質問や感想を児童に発表させたりしている。また、漢字の指導の際に「鼻」を教えるときには、英語で「Nose」と言うことを教えたり、「皮」の漢字を教えるとき、「皮肉」が出てきたら、どんな意味になるのかを児童に考えさせ、辞書を引かせたりしていた。

成果と課題：①先生の子どもの声掛けの仕方を参考に、私も児童への声掛けを机間指導の際

に実践した。私が具体的な言葉を使うことを意識するだけで、児童の授業に取り組もうとする態度が変化していったように思う。今後は、児童の実態に合った言葉選びや分かりやすくできるだけ短い言葉で、具体的に指導できるように技術を磨いていきたい。②先生の指導方法をもとに、文を書かせる活動をしたとき、文にすることができない児童には、まず自分が表したいことを言葉で説明させるように指導する。そして自分の考えをまとめるように助言されている。先生は児童の様子をととても観察されている。それは、授業中の児童への声掛けからわかる。どの児童がどの様な課題につまずいているのか、そのときどんな声掛けをすればその児童が解することができるのか、いつもの確な声掛けで理解へと導いていく。児童をよく観察し、実態を把握することは、個に応じた指導をするためにも非常に大切であるし、児童とコミュニケーションをしっかりと取れているからこそ児童に的確な声掛けをすることができると考える。今後は、私ならではの具体的な方法を考えていきたい。

#### 【事例2】「自信を持たせ、意欲を引き出す指導や声掛けについて」（5月～12月 13回実施）

1年生は、義務教育の始まりであり、学びの基盤となる。達成感を味わい、自信を持つことは自己肯定感を高め、学校生活を意欲的に送り、学校生活を充実させるために重要なことである。そこで、児童に自信を持たせ、意欲を引き出すにはどの様な声掛けや指導を行ったらよいか、担任の先生の声掛けの仕方や授業にどの様に取り入れているかを観察して明らかにしていく。また、自らも児童との関わりを通して実践し、実践力を高めていきたいと考え、本課題を設定した。

教員インターン実習の内容：私は児童が作品を作ったり、計算ができたりしたとき、「すごいね」などその結果に対する一次的な声掛けしかできなかった。外発的動機づけとして、児童の頑張りや良さを褒める際の手段として、声掛けの他にあまり考えたことがなかった。

観察：先生の授業の観察からは、漢字の学習で、「上手に書けなくてもいいんだよ。丁寧に書こうとする気持ちが大事だからね」と言われていた。その言葉を受け、上手に書けないと悩んでいた児童も「先生、丁寧に書いたよ」と嬉しそうに学習に取り組んでいた。また、先生は授業を1時間終えたら花マルを黒板につけておられた。満点だから花マルではなく、一人一人が最後までやり遂げることができたことに対しての花マルということを感じた。このように、学ぶ過程を大切にし、その頑張りを認めることで、児童は自信を持ち、次の活動へ意欲的に取り組むことができることを学んだ。そこで私も、宿題やプリント等を添削する際に、結果だけでなく学ぶ過程を大切に声掛けを意識的に行った。計算問題などで答えが違っていても途中の式が合っていたら、「式は合っているよ。引き算になることが分かったんだね」など結果に対する声掛けだけでなく、学びの過程も大事にした声掛けを行うようにしている。

成果と課題：児童自身が授業のめあてを考えたり、企画をしている様子を見たり、児童が自

主的に行ったことに対して声掛けを行うことで、自信を持ち、より意欲的に活動に取り組む姿勢を見ることができた。児童の自主性を生かし、認める声掛けや指導を行うことは学習や活動により意欲的に取り組むきっかけになるということが分かった。しかし私は、時間がなかったり、余裕がなかったりしてしまうと児童自身に考えさせるのではなく、自分が説明してしまうことがある。すると「せんせい、これでいいですか」などのように、児童が受け身的になり自分でやり遂げるという経験が少なくなってしまう。余裕がないときでも、児童にこの学習から何を学んでほしいのかということを冷静に考え、児童の自主的な行動を大事にしなければならないと考える。そのためには、私自身が活動の流れに見通しを持っておくことや、児童一人一人の様子をしっかりと把握し、自主性を生かすことができるように視野を広く持つことが課題である。児童一人一人の良さや頑張りを認める声掛けについては、図画工作科の授業で自分でできたところまでを褒めたり、前向きな声掛けを行ったりすることによって、自信を持ち、自ら次の問題に挑戦しようとする意欲が見られた。しかし、全ての児童が同じように褒めることによって、自信を持ち意欲を高めることができるとは限らなかった。私の声掛けのタイミングが合ってなくて、一人一人に応じた声掛けができていないと思うからだ。また、授業中だけでなくその他の関わりの中でも、良さを見つけ褒めることを意識することも今後の課題である。

さらに児童と根気強く向き合うことを通して児童理解に深め、一人一人の良さや頑張りを認めることができ、自主性を生かした授業や活動ができる教員になれるよう、努力していきたい。

この2事例では、学習に意欲を示さない児童、授業に集中することに課題のある児童、また自信が不足したり、悩んでいたりする児童に自信を持たせ自己肯定感を高める指導を取り上げるなど、授業中の生徒指導に係る事例であり、前述の大学への要望事項の『○授業における発問の仕方を学ばせてほしい、○生徒（ここでは児童）の理解の即した授業展開ができるようにしてほしい、○意欲を向上させる指導をしてほしい、○子どもたちが好きで、熱意のある人材を育ててほしい』に関連するものである。小学校3年生は、ようやく集団生活に慣れてきた発達段階である。校内組織を活性化し、学校を挙げて分かる授業を進め授業改善に取り組むことによって克服されることも多いが、児童の学ぶ力にも差が表れてくるのもこの時期である。他者との競争や結果に気づき始め、自己の意欲を支える成功経験や称賛が教師や家族から適切に与えられている場合は問題とはならないが、失敗経験や周囲を含めて不適切な声掛け（言葉）や指導が続くならば教育活動全般にわたって反感、拒否の態度が強まってくる。その背景には学校環境の他に家庭環境や経済的問題等の要因があることも考慮しなければならない。また、通常の学級に平均6.5%の割合で発達障害のある児童が在籍する学級においては、授業への集中が続かないことや学習に意欲がみられないことなどの顕在化する気になる児童の行動が低学年から継続して観察される。放課後や休み時間等に個別の教

育的対応を行ってもなお問題となる行動が6か月以上観察される場合は、校内委員会に諮り、適切な対策を講じなければならない事例となる。授業に対する興味・関心や勉強そのものに対する無関心の状況が生じ、周囲の児童や教師の不適切な言葉も加わるによって怠学の状態が継続・亢進し、高学年での二次障害（不登校）を引き起こすことが想定されるからである。

### （3）生徒指導等に関する成果

#### 【事例3】「児童に自ら考えさせる指導」（5月～12月 13回実施）

児童が自分で考え自らの行動を決定する機会が多い。授業に限らず、生活面でも自分がすべきことを考えたり、人の気持ちを考えたりしなければならない。今回のインターン実習では、（3年生の）つまづいている児童に対する声掛けに加え、生活面でもけんかの仲裁について実践していくことで、児童に自ら考えさせることのできる教員になりたいと思い、この課題を設定した。

教員インターン実習の内容：休み時間や昼休みに、児童と積極的に遊んでいる。外でケイドロやドッジボールをすることが多いが、遊んでいる際に児童の言葉遣いが気になった、軽い気持ちで相手にきつい言葉をかけることが多く、注意しても遊びに熱が入るとまた言葉がきつくなってくる。このことが原因でけんかになることが多く、遊びの途中でのけんかを仲裁することができないこともあった。先生は、休み時間に児童のトラブルやけんかが起こった際、お互いの話を聞き、きちんと自分の気持ちを相手に伝えるような声掛けをされていた。また、きつい言葉を言われたらどうかと、相手の気持ちを考えさせる指導もされていた。そこで私は、児童がきつい言葉を言ってしまうたり、けんかになってしまったたりした時は、当該児童の話を読み、そのような言葉を言われたらどんな気持ちかを考えさせるよう声掛けを行ったが、遊びの途中で出てくる言葉に対し、その都度注意し、言葉遣いを意識させる必要があると感じた。

成果と課題：遊びや普段の生活の中で、児童の言葉遣いを意識させることが必要であることが分かった。何気ない言葉でも、少し言葉が荒くなったり、言い方がきつくなってしまうりしている。その都度「その言葉はよくないよ」、「今の言い方どうだった？」と声を掛けることで自分の言葉を振り返らせることが必要であることが分かった。たった一言からけんかにつながることもあるので、言葉遣いに関してはしっかりと注意をしていきたい。私の課題として、児童のけんかの際にうまく双方の話を聞くことができず、片方の話に偏りがちになってしまうことがある。話をしっかりと聞き、お互いが納得するような声掛けを行いたい。これから教員になるにあたり、児童が自分の考えに自信を持つことのできる学級経営を行いたい。そのためにも、児童との関わりを通して場面に応じた対応ができるよう、実践を続けていく。

**【事例4】「学級を言語活動の場にするための教師の指導」（5月～12月 13回実施）**

私は、学級を言語活動の場にするための先生方の工夫を学びたいと考えた。私のインターン実習に入る学級は2年生で、元気で活発な子どもが多く授業中の発言も豊かであり、健康観察や係の連絡など、子どもたちが主体となって言語を使う場面がたくさんある。4月から学級経営に生かしていきたいと思い、課題を設定した。

教員インターン実習の内容：学級の子どもたちは、授業時間以外の健康観察や係活動などを通して、人前で話をしたり人の話を聞いたりする機会が多いと感じた。そこで、私は、健康観察と係活動での子どもたちの発言の様子と、それに対する先生の指導を観察しようと考えた。また、私自身が声掛けを通して、子どもたちが自分の思いや考えを自分なりの言葉で伝えられるようにしていきたいと考えた。この学級の朝の会は、健康観察が特徴的である。教師の呼名に対し、児童が返事するのではなく、伝えたい気持ちや出来事を自由に発言する。自由な発言の場なので、伝えたいことが特になく児童は何も言わない。しかし、先生は、積極的な発言がない児童を放置するのではなく、一人一人の個性に合わせて声掛けを行っていた。また、その中で児童の行動調整も行うことができることに気づかされた。インターン実習の活動日の朝の会での児童の様子や先生の声掛けを観察した。帰りの会には、係からの連絡という項目があり、毎日2班ずつ活動報告をする。その際の話し方や言葉遣いはどのように指導されているのか気になった。係の連絡の際には、児童はどのような時につまずきみせるのか、また、児童がつまずいた時の先生の声掛けを観察した。

成果と課題：児童の発言の特徴が分かった。男女では、男子の方が発言が多く、他者の話を聞いて表情を変えたり頷いたりするなどの反応を示すのは女子が多かった。周囲の私語を注意する児童は男女に差はなかった。はじめは自分の発言だけに一生懸命な児童がほとんどだったが、私語を注意する児童や他者の発言に対しての質問をする児童が出てきた。係活動では、係によって発表の実態が異なっていた。発表内容を自分たちで考えて自由に発表するので、児童は発表を始める時と終わる時にどんな言葉を使えばいいか分からずに困っていた。先生は、「〇〇と言いなさい」という指導はしていなかった。例えば、天気予報をする児童には、実際の天気予報を思い出させるような声掛けをしたり、昆虫のクイズをする児童には、どうすればみんながワクワクするか考えさせる声掛けをしたりしていた。先生の声掛けの観察はたくさんできたが、学んだことを活かし、実際に声掛けをする機会がまだ取れていない。これからのインターン実習では、児童が主体的に言語を使うことができるような声掛けを行っていくように心がけたい。

この2事例は、学級内の他者に対する言葉遣いに課題のある児童、またこのことが原因でけんかになる状況でその解決を課題とする道徳の内容と関連の深い事例、毎日の朝・帰りの会を活用し、健康観察での伝えたい気持ちや出来事を自由に発言する場を提供、係活動での活動報告で話し方や言葉遣いを考えさせることに課題をおいた事例である。前述の大学への

要望事項の『○コミュニケーション力を高める指導をしておいてほしい、○生徒（ここでは児童）の理解の即した授業展開ができるようにしてほしい、○自ら学ぶ意欲を育む人間形成をお願いしたい、○意欲を向上させる指導をしてほしい、○子どもたちが好きで、熱意のある人材を育ててほしい』に関連するものである。小学校低学年では友だちの立場を基準にして考えることができるようになり、子どもなりの考えで周囲を把握していこうとする強い努力がみられるが、まだ他者の視点に注意を向けることができない。このため自由な遊びの場では、言葉や行為を伴ったトラブルやけんかが多いのが特徴である。3年生では徐々に他者との関係を取ることが日々の学校生活全体の中で育まれていく。道徳の内容も自分自身のことを中心に内容がまとめられた低学年と中学年の内容は他者をより意識し、進んで他者との信頼関係を醸成する内容のものとなっている。言葉遣いは、気持ちのよい挨拶から始まり、明るく接することによって他者とのコミュニケーションを図る上で学校生活を豊かなものに整えてくれ、安心な言語環境を提供してくれる。しかし、言いたいこと・伝えなければならないことをしっかりと話すためには、自分の一次的な感情を抑制する経験を積むことや、事前に話す内容を考えまとめておく経験を重ねる必要がある。児童が話す、述べる、伝える場合に適切であるかその判断・調整、充実させていく役が担任である。前述の大学への要望事項の『○教職を目指す強い志をもって実習に臨んでほしい』については、事例に挙げていない学生を含め、今回インターン実習に参加した全員が各学校から最大の評価をいただいた。

#### （4）「ふれあい場面」の再構成シート

「ふれあい場面」の再構成では、児童のその時の心情や考え、行動を丁寧に記録して自己の観察や分析を記録できた。インターン実習に参加した18名中、授業、教育実習等により十分に参加できなかった1名を除き、17名が「ふれあい場面」の再構成シートを報告することができた。図3の「ふれあい場面」の再構成シートを下に教科指導・生徒指導に分けて、各自が経験した「ふれあい場面」の再構成に書かれた内容を分類したものが表4である。「ふれあい場面」の項目としては、教科指導と生徒指導の内容に分け、更に小項目に整理した。また表の各小項目を注目、成果、課題に振り分けた。17名の「ふれあい場面」の再構成シートの振り分けの方法は、図4に示した。

注目とは、担任の補助やスクールサポーターとして学級に入り児童と関わり指導する場面で、学生が自分にとって解決しなければならない問題として注目した内容である。成果とは、先生の承諾を受けながら児童との関わりを通して解決に向かった内容である。課題とは、学生が児童への働きかけを通してまあ十分に解決に至らないと判断した内容で、その後も学生がインターン実習で継続して自らの課題と考えた内容である。

表4から、学生が注目した項目は、授業の中で「学習意欲」、「叱ること・褒めること」が最も多くあげられ、次に「児童理解」、「声掛け」、「児童目線で話を聞くこと」「家庭

例えば、授業中の学級に入った時、C児の行動を観察していると「教科書を眺めているだけ」で指示されたページを開けないままに過ごすC児に机間指導で、「○ページを開くよ」と声掛けする。次に教科書を開くがみんなと一緒に音読しない（友達を見回し、少し不安そう）。「大丈夫だよ。今、ここだよ。」の声掛け。・・・学生は、なぜこの児童・場面を再構築しようと思ったのか。C児は、少し内向的で、国語の学習（読むこと）に支援の必要な児童であった。C児は、自分に自信が持てずにいたと考え、答え合わせの時間や音読の時間等、発表したり、教科書を一人で読んだりする活動で一度つまずくと、なかなか声が出せずにいる場面を多く見かけた。この事例の場合、学生の注目した内容は、教科指導の『学習意欲』『児童理解』と教科指導の中での生徒指導として、『声掛け』『叱ること・褒めること』にそれぞれ1ポイントを加えた。

図4 「ふれあい場面」の再構成シートの分類について

環境等の背景を理解する」、「教師（学生）と児童との信頼関係」、「気になる子に関すること」があげられた。学生が成果としての項目は、「叱ること・褒めること」が最も多く、次に「声掛け」、「児童目線で話を聞くこと」があげられた。課題として学生があげた項目は、「叱ること・褒めること」が最も多く、次に「学習意欲」、以下「児童理解」、「家庭環境等の背景を理解する」、「教師（学生）と児童との信頼関係」と続いた。

表4 「ふれあい場面」の再構成の分類（複数記述含む）

	項目	注目	成果	課題	合計
教科指導	授業中の発問や指示に関すること				0
	板書に関すること				0
	学習意欲（授業への主体的参加含む）	6	1	4	11
	児童理解（気づき、承認等）	3	1	3	7
	机間指導に関すること	1	1		2
	教材研究	1	1		2
生徒指導	声掛け（個に応じた働きかけ・児童の自主性に対して）	3	3	2	8
	叱ること・褒めること（肯定する言葉含む）	6	4	5	15
	児童目線で話を聞くこと	3	2	2	7
	言葉遣いや言い過ぎること	2		2	2
	児童間のけんかの解決	2	1	2	5
	素直に謝り、「いいよ」と言って許す	1	1	1	3
	相手の立場を理解する	1		1	2
	家庭環境等の背景を理解する	3	1	3	7
	教師（学生）と児童との信頼関係	3	1	3	7
	気になる子に関すること	3	1	2	6
その他	情緒の安定	1	1	1	3
	生活リズムの安定	1	1	1	3
	校内の安全な環境	1		1	2
	学級経営				0

## 7 考察とまとめ

### (1) 学生の学びを通じた資質・実践的指導力の向上

ボランティア活動日誌の点検については、小学校と大学教員の双方に次代を担う教員養成の課題が窺える。日誌の記載内容を手がかりに学生と双方の教員とのコミュニケーションが活発となって教育活動における教科指導法や生徒指導の課題解決に向けた取組等があげられ具体的な事例（個人情報保護は保護される中で）として学生や大学教員に情報を得られるならば、実務に直近した実習となり、教員養成に生かすことができると考える。

しかし、小学校・特別支援学校の学校教員の業務内容ではないボランティア活動への受け入れと協力に対し、教員の多忙感が指摘される中、活動日誌の様式や点検の方法等の調整が今後必要になると考える。

### (2) 生徒指導力の育成

学生の教師としての教科指導力と生徒指導力を知るために「ふれあい場面」の再構成を設定した。その結果、授業中の発問や指示、板書については、学生は取り上げなかった。これは、担任の補助として、机間指導で児童一人一人を観察する中で児童の学習指導に視点を当てて進めてきたためであろう。教材研究については1件あげられているが、アフタースクールに参加した学生が算数の指導について対応を図った事例である。他の「ふれあい場面」の再構成の事例と異なった取上では、「校内の安全な環境」の内容があげられる。小学校内の安全確保は登下校・実験等多岐に渡るが、児童の遊び環境に視点を当てた指摘内容で、普段の学校生活における教員の予測可能性に言及したものであった。また、「気になる子に関すること」の取上は、知的発達の遅れのない発達障害で診断の有無にかかわらず通常学級に在籍する「気になる子」の存在である。平成17年度以降、小・中学校では積極的に教科指導、生徒指導等で特別な教育的配慮の必要な児童生徒として対応が求められている事項である。

インターン実習では学習意欲を高めるために多くの学生が授業中の児童の言動に注目し、机間指導の中で声掛けを行ってきた。その手立てとして「褒める」ことを通して児童の行動を観察してきた。「すごいね」「できたね」と言って、結果に対して声掛けや褒めることしかなかった学生がいた。そして先生の声掛けの状況を観察するとこれまでの自分の声掛けや褒めることとは異なることに気がついた。児童の学習に対する努力や丁寧さ、立式までの考え方等について、具体的に「声掛け」「褒める」ことを行って、例えば上手に書けないと悩んでいた児童も嬉しそうに学習に取り組んでいることからこの内容を深めていった事例があった。同様に、授業に積極的ではない児童、つまづきやすい児童を授業に参加させることに「声掛け」「褒める」ことを行うだけでは不十分で、主体的に授業に参加することの大切さが理解でき、この内容を事例として考察したものもあった。

アフタースクールに参加した学生の「ふれあい場面」の再構成では、放課後の復習指導の

時に特定の児童から「家庭環境等の背景を理解する」情報が入手されたり、また指示が通らない児童、学習意欲に問題のある児童、長時間プリント問題に集中できない児童等がいたりする中で、指導者としてどう声掛けすればよいかと悩みながら、強く指導する場合には、「教師（学生）と児童との信頼関係」が何よりも必要であることを強く感じて、取り上げた「ふれあい場面」もあった。

以上のようにインターン実習は、特定の学生が特定の小学校・学級に1年間継続して活動を行い成果が現れてくるものである。学級での定位置を確保するためには、参加する学生には社会人としてのルール（時間の厳守、挨拶、返事、報告、言葉遣い、服装、頭髪等）が必要で、その上に自ら学ぶ意欲を発揮し、自己を向上させる強い意志と子どもたちが好きで、熱意のある者が充実したインターン実習を自分のものにすることができると考える。

### （3）教員養成の対策

学生が在学中に知識を蓄え教育機関での多くの経験を経て、自己の教員指向の点検を行い、将来の進路決定をする過程で大学が行う対策は大きな効果をもたらす。しかしながら、基礎学力や専門教科に関わる力は現行の教職課程だけで担うことができるものでなく、学科全体で取り組まねばならないことである。このような学生の多様化は大学にとっては未経験の事項であり大学の努力では改善に時間がかかり、その能力にも限界がある。本学での様々な対策（一般教養セミナー、自修塾、学生ボランティア活動、平成26年後期から始められた地元小学校教科研究大会や特別支援学校研究大会への参観への取組等）への評価を行いつつも、学生の対策への理解と教職への進路選択の意欲的な取組について短期に多大な効果を得ることのできる方策を取捨選択・組み合わせを検討する必要があると考える。

### （4）まとめ

今回、本学の学生17名が北九州市内の小学校3校で1年間を通して教員インターン実習を行った。インターン実習で学生の感想は、「教師として働く前に体験できて本当に良かったと考える」、「この経験を十分に活かし、私も先生のように”児童と共につくる授業”ができるよう、自分の力を高めていきたい。」、「大学の授業や本などで読んで学んだ知識を、現場で経験することでより深く考えることができたと思います」に代表するように参加した学生全員が充実した経験となった。この内容を次年度への活動に活かしていきたい。

最後になりましたが、大学との信頼関係の下に教員インターン実習を快くお引き受けいただいた3校の小学校の校長先生・北九州市教育委員会と学生のために親身になってご指導いただいた諸先生方に心から感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1)教職課程の質の保証等に関するワーキンググループ（第2回）配付資料 検討事項「専修免許状の取得における実践的科目の必修化」検討のためのたたき台 （2012）文部科学省
- 2)平成18年中央教育教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006）文部科学省
- 3)鎌田義彦・川野司・松村千鶴「平成25年度教員インターン実習のまとめ」報告 2014
- 4)玉川大学「平成25年度 教員の資質能力向上に係る先導的取組事業」報告 2014 P73-P81
- 5)池田貴城「教員養成政策の最近の動向について」教師教育研究 第27号 P1-P8
- 6)川島 真「多様化する学生と教育実習条件について」教師教育研究 第27号 P55

## **Achievements and Challenges in Intern Training for Prospective Teachers in FY2013**

Yoshihiko KAMATA\*<sup>1</sup>, Tsukasa KAWANO\*<sup>2</sup>, Chizuru MATSUMURA\*<sup>1</sup>

\*<sup>1</sup>Course of Human Development, Faculty of Humanities, Department of Human Development, Kyushu Women's University

\*<sup>2</sup>Department of Social Welfare, Faculty of Nursing and Social Welfare, Kyushu University of Nursing and Social Welfare

\*<sup>1</sup>1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka 807-8586

\*<sup>2</sup>888 Tomino, Tamana-shi, Kumamoto 865-0062

### Summary

The intern training for prospective teachers in FY2013 (hereinafter referred to as intertraining) was conducted at three elementary schools in Kitakyushu City with 18 students from the Department of Human Development. As it is considered to deepen and enhance volunteering experiences, this intern training has become a part of vocational education to enhance practical skills for the next generation prospective teachers, who are planning to enter the teaching profession in April, 2014. Additionally, this intern training was conducted under the trust between the universities and elementary schools, to provide practical work experiences to learn subject teaching skills and student guidance skills that are necessary to carry out elementary school teaching efficiently. As a result, the students went through a lot of realization and learning regarding subject teaching and student guidance, through firsthand experiences assisting classroom teachers or guiding students directly. This experience led to the improvement of the students' skill and showed effectiveness in finishing up their teaching trainings. Also, a better collaboration within the school organization and cooperating schools to ensure the same results was mentioned as a challenge for the future.